

学問の動向をふまえ、個々人が体験する音を聴く、奏でるという一過性の時間に着目した、と著者はいう。しかしここに描かれるクルン社会は、変化しつつあるとはいえ、肉を平等にわけるとコミュニティのつながりが固く、精霊に対する観念や、楽しむことなどの価値観もおおむね共有されていた。著者が着目したのは、そういう社会の中での一過性に移ろい行く音である。著者は、近年の民族誌的学問は、グローバル化などによる近年の社会や生活様式の変化を背景として個人に着目するようになったという。しかし、そうした動向を踏まえて執筆されたという本書の事例は、それとは異なる。

さらに、第1章の村の概要の部分に、新たなメディアの侵入によって調査地ではポップスも聞かれているとある。そのような新しいものを含む日常の音に対して、世代間による感じ方の違いは生じていないかなど、変化の様態に関しても知りたところである。

評者は、タイ北部の山地民ルワの竹の音具「ピ」について発表したことがある〔馬場 2014〕。「ピ」は、陸稲の豊作を祈って稲魂をもてなすために音を出す道具であり、旋律があるが楽曲の演奏が目的ではなく、明確に「楽器」とカテゴライズしにくい存在である。それだけに、本書のようなカテゴリーに位置づけられないものへのアプローチ、著者のいう「対象を明晰に捉えて厳密に分析しようとする学問の姿勢からこぼれ落ちるもの」への注目、非常に共感できるものであった。

評者はかつて、大分のカテリーナ古楽器研究所を学生たちと訪れ竹楽器づくりの実習を行ったことがある。本書を読み終えたとき、その際に所長の松本公博氏が語った、竹林での伐採の際に、「『切ってくれ』と呼びかける竹がある。そうした声を手掛かりに切る」ということばを思い出した。そこには、音や気配といったものへの気遣いという本書の著者の関心との共通性がある。その実習の際、学生たちは、竹を自由に切ることで新たな竹楽器をその場でつくりあげた。その経験と、本文中の「ブング・ブ」についての指摘にあったクルンの子どもたちが偶然竹を叩いて遊ぶ時に感じていたであろうここちよい音とのあいだには、音

と音楽、竹という物質、偶然性、気分などといった共通のテーマがあると思われる。本書がとりあげて追求した日常的な音に関する探求は、音に耳を傾け自然素材と触れることで、自然との関わりの中で身体性を見直すことや、効率性追求とは異なる、創造性を生む偶然性への注目などにつながる。これらは、我々の社会の中でもその気になれば見いだせる、重要な視点である。

(馬場雄司・京都大学東南アジア地域研究研究所
連携教授)

参考文献

- 馬場雄司. 2014. 「農具と楽器のはざまで」『もの
とくらしの植物誌——東南アジア大陸部から』
落合雪野・白川千尋 (編), 207-229 ページ所
収. 京都: 臨川書店.
- フェルド, スティーブン. 2000. 「音響認識論と音
世界の人類学——パプアニューギニア・ボサ
ビの森から」山田陽一 (訳). 『自然の音・文
化の音——環境との響きあい』講座 人間と環
境 11. 山田陽一 (編), 26-63 ページ所収. 京
都: 昭和堂.
- 山田陽一. 1991. 「音と生態の認識論——パプア
ニューギニアの熱帯雨林から」『民族音楽叢書
7 環境と音楽』藤井知昭・山田陽一 (編),
15-45 ページ所収. 東京: 東京書籍.
- 押川典昭. 『プラムディヤ・アナンタ・
トゥールとその時代』上巻・下巻. めこん,
2025, (上) 551p. (下) 620p.

プラムディヤ・アナンタ・トゥール (1925-2006)
はインドネシアを代表する国民的文学者であり、
20世紀のアジア文学を語るうえで欠かせない作家
である。植民地時代末期のジャワを舞台にした
「ブル島四部作」(『人間の大地』『すべての民族の
子』『足跡』『ガラスの家』)は数十カ国語に翻訳さ
れ、世界文学の重要な作品として読み継がれてき
た。インドネシアからノーベル文学賞受賞者が出
るならプラムディヤだとしばしば言われてきた。
小説のみならず、戯曲、評論、評伝、翻訳、メモ

ワール、歴史資料や辞典の編纂まで幅広く活動し、長年にわたってインドネシアの知的公共空間に強い影響を与え続けた。

インドネシア研究においても、プラムディヤ作品は歴史、社会、政治文化を考えるための重要な手がかりとされてきた。ベネディクト・アンダーソンは、作品に描かれる言語、権力、ナショナリズムの問題に注目し、そこからインドネシアを理解するための多くの示唆を引き出した〔アンダーソン 1995; 2005〕。また、ジェームズ・シーゲルは、プラムディヤ文学のなかに言葉そのものが社会や政治を動かす力への鋭い感覚を見いだしている〔Siegel 1997〕。

従来の研究は作品分析に重点が置かれる傾向が強く、プラムディヤ自身がどのような環境で育ち、何を経験し、その時々になどのような判断や発言を行ったのかについては必ずしも十分に検討されてこなかった。本書は、一人の人間としてのプラムディヤの生涯をたどることで、その文学と思想を読み解こうとする試みである。

本書は、植民地支配、日本占領、独立革命、冷戦、1965年政変とその後の長期拘禁、さらに民主化へと至る激動の歴史のなかにプラムディヤの生涯を位置づける。そして、どのような状況で誰と関わり、何を考え、何を書いたのかを、膨大な資料と証言をもとに詳細に描き出している。本書の意義は、作品理解の背景を補うことにとどまらず、作品・作家・時代を切り離さずに捉えることでプラムディヤ文学が持つ意味を問い直している点にある。

本書は上下二巻から成る。上巻には第一章から第四章、下巻には第五章から第八章に加え、プラムディヤの作品リストと略年譜が収められている。以下、各章の内容を簡単に紹介したい。

第一章「故郷プロラ 1925年-1942年」では、植民地時代末期のジャワの地方都市プロラで過ごした幼少期とその家庭環境が描かれる。民族主義教育に情熱を注いだ父トゥールは、植民地政府による私学校への規制や世界恐慌の影響を受け、教育事業を行き詰らせていく。一方、母サイダは商いなどを通じて家計を支えながら、読書や語りによって子どもたちに文化的な素養を与える存在と

して描かれている。こうした対照的な両親のもとで、少年プラムディヤには父への反発と失望、そして母への深い共感が育まれていった。

第二章「日本軍占領下で 1942年-1945年」は、青年期のプラムディヤが植民地秩序の崩壊を目の当たりにし、日本占領下での経験を通して言語と政治に対する感覚を形づくっていく過程を扱う。ジャカルタでは同盟通信社に勤務するかたわら、速記者養成所でスカルノやハッタらの講義に接し、インドネシア語への強い意識を培っていった。しかしその一方で、日本の掲げる解放の理念と戦争の現実との隔たりにも直面し、日本を「解放者」とみなす期待を失っていく。

第三章「独立革命期 1945年-1949年」では、独立宣言から主権移譲に至る激動の時代のなかで、プラムディヤが革命に参加し、その現実を内側から見つめていく姿が描かれる。独立への熱狂の一方で、社会には接収や略奪や私刑をとまう暴力が広がり、旧秩序の担い手と見なされた人びとにも攻撃が向けられていった。共和国軍に加わったプラムディヤは記録や報道を担う兵士として革命に関わるが、その経験は、革命を英雄譚ではなく暴力と生存の只中に置かれた人間の物語として描く視点につながっていく。さらに、オランダ軍による拘禁と獄中での創作経験は『無力な者たち』『追跡』『ゲリラの家族』などの作品へと結実し、革命が個人や家族や人間関係に及ぼす破壊を見つめる文学の出発点となった。

第四章「文学と政治の間で 1950年代」では、独立後の「未完の革命」の時代を背景に、プラムディヤが文学者としての地位を確立するとともに、政治的知識人としての性格を強めていく過程が描かれる。『汚職』『金歯の恋人ミダ』『ジャカルタからの物語』では、独立後の社会の腐敗や都市の貧困、そして女性の疎外と抑圧といった問題が取り上げられた。プラムディヤは、独立後初の総選挙では既成政党への不信から白票を投じたが、中国訪問やアジア・アフリカ作家会議への参加を経て作家には社会的責任があるという認識を強め、共産党系の文化団体レクラに加入する。本章は、こうした左傾化を、文学と公共性をいかに結びつけるかという問いを追究した結果として描いている。

プラムディヤにとって、文学は社会から切り離された芸術ではなく、社会に働きかけて現実を変え力を持つべきものとして理解されていた。

第五章「政変まで 1960年-1965年」では、1960年代前半のプラムディヤが歴史家・文学史家としても活動し、レクラの文化運動にも深く関与していく様子が描かれる。プラムディヤは、華人文学、低ムラユ語文学、ニヤイ物語、カルティニの再評価を通して、植民地期以来の文学史や歴史叙述の枠組みを組み替えようと試みた。また、『ビンタン・ティムール』の文化欄「ルンテラ」を拠点に、他の作家、文学評論家、「文化宣言」派を批判し、文学をめぐる論争の前面に立つようになる。こうした対立は作品評価や文学理念の違いにとどまらず、スカルノ体制下の政治的対立と結びつき、作家の立場や発表の場、教育や出版のあり方を左右する争いへと発展していった。

第六章「三たび政治囚として 1965年-1979年」では、九月三〇日事件後の反共弾圧のなかでプラムディヤが「国家の敵」とされ、裁判もないまま長期拘禁されていく過程が描かれる。サレンバ拘置所を経て送られた流刑地のブル島は、隔離、強制労働、思想矯正、農業開発、労働搾取が一体となった国家暴力の空間として描かれている。極限状況のなかでプラムディヤは仲間たちの支援を受けながら執筆を再開し、『逆流』やブル島四部作、さらにメモワールや元慰安婦に関する記録作品などを生み出していった。これらの作品は、スハルト大統領のもとで新秩序体制が作り上げた公定史に対抗し、インドネシアの歴史を別の角度から想像し直そうとする試みとして位置づけられる。また、妻子や兄弟も弾圧の影響を受けたことを通して、国家暴力が個人だけでなく家族関係を引き裂いていく様子も描き出されている。

第七章「強権に確執を醸す 1980年-2006年」では、釈放後のプラムディヤがET（元政治囚）の烙印を押され、移動や執筆や交友を厳しく制限されながらも、ブル島四部作の出版などを通じてスハルト政権下の新秩序体制が築いた公定史に対抗する姿が描かれる。彼の著作は相次いで発禁処分を受けるが、禁書であることが若い世代の関心を呼び、作品を読む行為が体制への抵抗の意味を帯

びていった。スハルト退陣後に進められた謝罪と和解をめぐる議論に対して、プラムディヤは責任の所在を曖昧にしたまま進められる「和解」のあり方に強い違和感を抱いていた。また、頑固で家父長的な夫・父としての一面や、長年の同志であったハシム・ラフマン、ユスフ・イサクとの決裂にも目を向けている。

第八章「エピローグ」では、国際的な名声を得て家族に囲まれた晩年のプラムディヤが、なお祖国の現状への怒りや長期拘禁の記憶を抱え続けていたことが描かれる。晩年には小説創作から距離を置いていたものの、「インドネシア地理事典」や編年史の編纂作業に取り組み続け、記録する営みを最後まで手放さなかった。本書は、プラムディヤ文学の核心は国家や革命の大義の陰で忘れ去られてきた人びとの歴史を語り続けることにあったと総括している。

本書には、プラムディヤ研究、インドネシア研究、アジア知識人史研究の観点から見て多くの意義があるが、そのすべてをここで論じる余裕はない。以下では、評者の関心に引き寄せながら、本書が浮かび上がらせるプラムディヤの知識人像、そしてそれと深く結びつく父性の問題に焦点を当てて考えてみたい。

本書は、プラムディヤを自らの文章、行動、記録を通して時代に関わろうとした知識人として描いている。雑誌や新聞への寄稿、文学論争、歴史叙述、講演、権力への異議申し立てなどを通じて、インドネシア社会が何を記憶し、どのような未来を構想するのかを問い続けた。文学は、社会に働きかけて人びとの歴史認識や倫理観を揺さぶる公共的实践として位置づけられている。

その活動の広がりにはインドネシア国内にとどまるものではなかった。プラムディヤの思想や実践は、植民地支配、日本軍占領、冷戦、中国との接触、アジア・アフリカ会議、国際文学運動といった越境的経験のなかで形成されている。日本占領期の経験、同盟通信社での勤務、日本人との交流などを通じて、プラムディヤの世界は日本とも少なからず交差していた。プラムディヤを理解することは、日本と東南アジアとの関係を考えることであ

ると同時に、20世紀のアジアにおいて知識人が国家、革命、暴力といかに向き合ったのかを問い直すことでもある。

下巻には略年譜が付されており、プラムディヤの生涯だけでなく、没後の動向まで含めて丁寧に整理されている。略年譜は、1981年の講演「第三世界における知識人の態度と役割」が2016年に刊行されたという記述で締めくくられている。著者は、知識人とは何かという問いを最後まで抱え続けた人物としてプラムディヤを位置づけようとしているように思われる。

また、略年譜が2016年で閉じられているところには、プラムディヤ的な知識人のあり方がその後の世界においてなお可能なのかという、著者から読者への問いかけが込められているようにも感じられる。そこには、プラムディヤ的な知識人のあり方が通用しなくなった世界のことは考えたくないという著者の悲痛な思いが込められていると思わずにいられない。プラムディヤは、文学と言論を通じて社会全体に語りかけ、権力や不正義に対して批判的な立場を貫いた知識人であった。彼が生きた時代には、公共的なメディアを通じて広く社会に発言できる人は限られていた。知識人とは、そうした限られた発言の場を担う者として、社会に対して責任ある言葉を発する存在でもあった。しかし、SNS時代の現在、誰もが容易に発信者となることができ、公と私の境界も曖昧になっている。発言の場が無数の個人へと開かれた時代に、社会に向けて責任ある言葉を語ろうとする知識人の声は、どのように受け止められるのか。プラムディヤの姿は、現代における知識人の可能性と限界を考えるための重要な手がかりとなっている。

本書は家族のなかのプラムディヤにも目を向けている。とりわけ印象的なのは、プラムディヤと父親との複雑な関係と、彼自身が父となった後に抱えた葛藤とが重なり合うように描かれている点である。

プラムディヤは作品のなかで父的存在をしばしば批判的に描いてきたが、父性や権威を否定していたわけではない。プラムディヤもまた、文学を通じて社会を教育し、人びとを導こうとする「父的知識人」の側面を持っていたように思われる。

ここで問題となるのは、父性を否定するか否かではなく、いかなる父性が社会を導くのかではないだろうか。

白石さやの議論〔Shiraishi 1997〕を借りるならば、スハルトとプラムディヤはいずれも「家族」という国民的概念を構築する力を持った存在として捉えることができる。スハルトは国家を「家族」として統合する「父」として振る舞った。他方、プラムディヤは親や王を批判しうる別の成熟モデルを提示しようとしていた。両者の対立は父性の否定をめぐるものではなく、いかなる父性が社会を導くべきかをめぐる競合として読むこともできるだろう。

本書はプラムディヤがどのような父であろうとしたのかを主題的に論じているわけではない。しかし評者は、家族との摩擦、同志との軋轢、周囲への厳しさが具体的に描かれているからこそ、その問いが気になってしまう。正しさを貫くことは、誰を支え、誰を傷つけるのか。そこから浮かび上がるのは、抵抗の知識人とは何か、そして公と私をいかに接続するのかという問題であり、ひいては知識人の倫理そのものをめぐる問いでもある。

本書を読みながら考えたのは、『ガラスの家』における「見る／見られる」という構造である。『ガラスの家』はしばしば植民地国家による監視体制を描いた小説として読まれる。『人間の大地』にはじまる「ブル島四部作」は、第三部までミンケ自身が語り手となり、植民地社会のなかで近代的知識人・ナショナリストへと成長していく過程が描かれている。しかし第四部『ガラスの家』では、語り手が植民地官僚パンゲマナンへと切り替わり、読者がミンケの声として読んできた物語が、実は植民地国家によって収集・管理されていた記録であったことが明らかにされる。

パンゲマナンは、ナショナリズム運動の監視を担う官僚としてミンケの思想や行動を観察し、記録する役割を負っている。そこでは、「見る者」と「見られる者」の関係が相互に作用し合うものとして描かれている。パンゲマナンはミンケを観察する過程で自らもまた「ガラスの家」に閉じ込められた存在であることに気づいていく。「見る／見ら

れる」という関係は、支配の構造であると同時に見る側を変化させる関係として描かれている。

『ガラスの家』に見られる「見る／見られる」という構造は、本書の評伝という営みにも重なっている。著者は、権力によって奪われ、歪められてきたプラムディヤの生涯を、作品と時代の文脈のなかに置き直していく。その過程で浮かび上がるのはプラムディヤ一人の物語だけではない。彼を受け止め、語り、攻撃し、排除し、あるいは読み継いできた同時代の人びとの姿であり、さらに植民地主義、革命、国家暴力、文学と政治の関係でもある。

本書は、記録とは何か、歴史を語るとは何か、そして誰がその記憶を受け継いでいくのかを問いかけている。『ガラスの家』では、ミンケの物語がパンゲマナンによって記録され、さらに別の人物へと手渡されることで後の世代へ継承されていた。この評伝もまた、プラムディヤという存在を次の世代へ手渡そうとする試みである。読者は、プラムディヤの人生を読むことを通じてその継承の連鎖のなかへと組み込まれ、この記録をどのように受け取り、どう語り継いでいくのかを問い返される。本書もまた、そうした継承の連鎖のなか

で、これから多くの読者に手渡され、時代を越えて読み継がれていくことが期待される。

(西 芳実・京都大学東南アジア地域研究研究所)

参考文献

- アンダーソン、ベネディクト・R. O'G. 1995. 『言葉と権力——インドネシアの政治文化探求』中島成久（訳）。東京：日本エディタースクール出版部。（原著 Anderson, Benedict R. O'G. 1990. *Language and Power: Exploring Political Cultures in Indonesia*. Ithaca: Cornell University Press.）
- アンダーソン、ベネディクト. 2005. 『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』糟谷啓介ほか（訳）。東京：作品社。（原著 Anderson, Benedict R. O'G. 1998. *The Spectre of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia, and the World*. London: Verso.）
- Shiraishi, Saya. 1997. *Young Heroes: The Indonesian Family in Politics*. Ithaca: Cornell University Press.
- Siegel, James T. 1997. *Fetish, Recognition, Revolution*. Princeton: Princeton University Press.